

(181) 133 (1979)

高校通信

東書

倫理・社会  
政治・経済

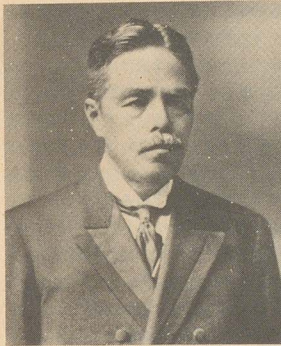
NO. 173

東京書籍

- 内村鑑三・科学者から宗教者へ **宇田道隆・1**
- 「家族」の扱い—— 田原恭蔵・9
- 思索を深めるための読書案内⑨個人と国家・4
- 労働運動の必要性和問題点の展開—— 磯部隆文・11
- 発展途上国にみる日本追い上げの諸条件—— 田中克彦・6

あけましておめでとうございます 昭和54年元旦 東京書籍株式会社取締役社長 鈴木和夫

## 内村鑑三 科学者から宗教者へ



余は日本の爲の  
日本は世界の爲の  
世界は基督の爲の  
基督は神の爲の也  
大正元年十月廿一日  
札幌鑑三

内村鑑三先生は1861年に生まれ、1930年に死んだキリスト者である。武士の子内村鑑三は、幼少のころ故郷の上州高崎付近で自然に親しみ、手製の漁具でアユやハヤ、ウナギ、ナマズなどをとり、習性を観察するうちに天然の物に愛を覚え、自然研究することに心を寄せるようになった。明治6年(1873)上京して赤坂表の有馬私学校英語学科に入学(12才)、翌年3月東京外国語学校英語学下等第4級にはいった(13才)。

少年の時に英語を学んだことがその考え方に開化的大影響を及ぼしたのであろう。明治10年やって来た北海道開拓使出仕の官費生募集演説にひきつけられ、未知の雄大な北海道の天地にあこがれて第2期生として札幌農学校にはいり、特に動物学と地理学に心を傾けた。

開校当時教頭として招かれたマサチューセッツ州立農科大学校長ウイリアム・スミス・クラークは、内村らの入学前に「Boys, be ambitious!」(諸君、大志を抱きたまえ)の一語を残して去っていた。しかしクラークは数十冊の聖書をたずさえて来て道徳教育の教科書として用い、帰国前に第1期生全員に「イエスを信ずる者の契約」に署名させていた。内村ら第2期生は熱狂的な第1期生と同じ契約に署名を強要せられた。級友の続々陥落の最後に3か月がんばった内村も遂に署名し、翌年(1877)6月2日受洗した。時に18才であった。クラークの伝道がみのって、内村たちは神を信仰し、聖書に生きつつ科学を愛し、真理探究の喜びにひたる日々を得た。

内村鑑三は少年時代から歴史と地理を好み、一時は地理学者になりたいと思った。だが北海の大自然に接してから、漁猟資源の開発のための実用的な魚、鳥獣などの動物学を専攻しようと決意した。

北海道を巡って、東岸でサケ漁、西岸でタラ漁を視察し、豊富な海産生物を各地に見て、「我ハ北海道ノ漁夫トナルカ、ガリラヤノ漁夫トナルカ、ソノイツレナルカ言フコト能ハズ」とのべたが、結局キリストの後に随ったガリラヤの漁師ペテロが彼の行く道になった。

明治14年(1881)7月札幌農学校を卒業の日、第2期生の首席で、「大洋の農耕、漁業もまた学術の一なり」と題して演説した。「漁業に対する水産学は農業に対する農学のように一つの科学として発達させねばならない。日本のように水産物に富んだ国ではその研究をゆるがせにすべきではない」と力説した。そのとき「日本のような島国では国を富まし、民衆を益するため水産を盛んにして富の過半を水から得なければならぬ」と考え、「よし!自分は日本一の水産学者になってやろう」と決心していたのであった。今から

### ●宇田道隆

約100年前に明治開化に臨んだ満20才の青年の言葉に200海里時代の今日胸を打つものがある。卒業式演説の後、内村鑑三は学生に向かい言った。「今私たちは本校を卒業しましたが、決して無事泰平を享受するつもりはありません。真理のため働こうとすれば必ず艱難が私たちを待っているでしょう。この卒業式はその苦しい道、真理のためたたかう道への入口です。在校生諸君！どうか私たちの志をついで下さい。安楽なやすい生活に満足せず私たちのあとを継いで真理のためにいつでも命を捨てる困難な道に進んでください。その言葉が終わると、一同水を打ったようにシーンとなり、やがて静かなすすり泣きの声だけが聞こえた。皆は拍手するのも忘れていた。後年の、大説教者の卵の熱弁が、皆の心を打ったのである。

卒業後直ぐ北海道開拓使御用掛となり勸業課漁殖科につとめ、水産調査に従った。明治15年(1882年)9月、アワビの卵子を顕微鏡の下にはじめて発見したときは感激の喜びに涙に溢れ、赤岩山頂上に登って、はるか前方に日本海を望み見ながら神に感謝の祈りをささげた。アワビの成熟時季を確認するまでの努力は大変なものであった。こうしてこの年10月に提出された「札幌県アワビ<sup>はん</sup>蕃殖調査書」は大変な学問的労作とされた。日本で最初の水産調査報告は内村の主張で生まれ、日本水産業に関する科学的研究はこの調査書に始まったと藤田経信博士(1938年、北海之水産108号)がのべている。このときの内村鑑三の業績を示す記念すべきアワビ殻の大小の標本は今でも北大博物館にある。この内村の調査復命書に潜水器使用見込み上申書がついていて、その中に聖使徒パウロの言葉が引用されており、公文書中に空前のこととされた。とにかく当時の内村鑑三は科学と宗教とに同時に生きていたことを証明している。内村開拓使御用掛は、1期上級生で同僚の伊藤一隆(1886年渡米、サケ・マスの人工孵化法を日本へ導入、千歳孵化場を起こした人)と水産調査で北海道内出張中にもキリスト教を伝道し、禁酒宣伝などもやった。1882年1月、「札幌教会」献堂式に内村鑑三は「帆立貝とキリスト教の関係」を講演した。この教会は、元来は農学校に芽生えた1期生・2期生を中核とし、教派から独立した教会で、後に「札幌キリスト教独立教会」となった。原始教会的に「イエス・キリストと十字架」の福音を信じて伝道にいそむ、美しく平和な、家庭的教会であったが、「靈魂の救い」の力はまだ欠けていた。宗教と科学の闘いはガリレオの裁判でも知られ、チャールズ・ダーウィンは、1859年に「種の起源」を著して「進化論」を説き、宗教界に大波紋を起こした。だが、科学者内村鑑三は進化論を真理として、これに忠信な学徒であることがキリストと聖書に忠実な「しもべ」であると確信していた。宗教も科学も悪用されれば悪魔的毒害となる。だが人類は宗教から科学、科学から宗教へと進化の道をたどった。

内村鑑三は明治15年(1882)12月に上京して、札幌教

会のメソジスト監督教会に対する借金を返済したあと、そのまま東京に滞在した。同年2月創立された大日本水産会(発起人24氏中に内村鑑三の名もある)でたびたび人気のある講演者として講演し、同会々報に寄稿が載った。明治16年(1883)2月号の「漁業と気象学の関係」では漁船の海難防止と漁業の科学的開発を説き、同17年7月号に「漁業と鉄道の関係」をのべて水産物の流通配給問題を論じ、同10月号に「タラの発生」を、同12月号に「ニシンに関する調査成績」と、続々学術的報告文を出し、大日本水産会報の価値を高めた。

農学士内村鑑三は明治16年5月東京で開かれた第3回キリスト教徒大親睦会に札幌教会を代表して出席し、「空の鳥と野の百合の花」の講演で名をあげた。それは神の御手による造化(大自然)をさぐる適当な方法を示すことであった。「造化ヲ観テ造化ニ止マラス、マサニ造化ノ神ヲ見ルニ至ル」というのが科学者内村の信仰であった。造化を学ぶのには科学的方法(顕微鏡や望遠鏡を用い、重力とか化学物質など実学的に研究して学びとる)と、信仰による方法がある。前者が後者を深め、確かめる。自然を科学的に観察し、その構造を究明することで造物主(神)の知恵の深さに驚き、賛美し、結局信仰を通じて「万物が造り主の神の愛を現す」ことを知るといっているのである。言い換えると前記の2法は内村にとっては1つであった。信仰に基づいて大自然を観、科学的に究明するとき、神の存在を確認できる、と内村は喝破した。彼は「天然は第2の聖書である」と言い切った。宗教は科学を霊界に移したようなもので、「アワビやニシンを究めたと同じ精神と方法で聖書を究めるのだ」とも言った。内村鑑三は水産生物学からキリスト教の宗教宇宙観にはいった。自然探究者の筆者はこれに共鳴する。ニュートン、アインシュタイン、ダーウィン、パスカル等々偉大な人々の宇宙観、世界観はやはり同様のカテゴリーにはいる。科学的宗教人内村は昇華されて全き人となった。

内村鑑三は明治16年(1883)に23才で開拓使を退職し、農商務省水産課につとめ、「日本産魚類目録」をまとめ、599種を記載した。これはシーボルト以来の学績とされた。その前ニシン漁業調査成果をまとめて、博引旁証、理路整然とし、学界は内村の学殖に驚いた。だが彼自身は宗教界に何もしておらぬと悩んだ。

1883年8月21日付の無二の親友宮部金吾(北大教授となり、植物学の権威。文化勲章を受章)あての手紙に、「我ハ生物学ヲルベキカ? 漁業カ? 伝道カ?」と将来の方途に迷い、結局「働いて待つことを学ぶ」と、漁業と生物学を勉強し将来の機会を待つときめた。

だが、研究に没頭するには「どうしたら自分は神と人類のために最も役立つことができるか?」といった内省が余りにも強過ぎた。「漁業の研究は大変自分には面白いけれども、社会に奉仕しようとする自分の生涯の目的からはこれでよいのか?」と疑って、「どうも自分の貧

弱な身体と健康では海上作業には自信がない。自分は靈魂のことに興味がある。自分のできる限りのやりかたで靈魂に光明をもたらすよう色々やってみることだ」と考え出した。水産課での仕事は「水産慣行調べ」、主にその博物学的部分の担当をまかされていた。チェンバーレン博士の「日英辞典」に入れる日本魚類目録調製もし、漁業の70ページの本も書いた。

一方で結婚問題で悩みが起こったが、1884年2月婚約決定し、「非常に楽しく時を過している。午前9～12時農商務省へ出勤し、主に外国の漁業を研究、それから東大医学部で松原新之助(後に初代の農商務省水産講習所長)と魚類を研究、ちょうど今板鯉類(サメの類)を調べており、今日1新種の魚を発見、多分新種族を構成するものにちがいない。魚類と漁業が今の僕の時間を大部分占領している。身体は今非常に魚臭い」と手紙に書き、研究に弾んでいた。同年3月28日浅田タケと結婚したが、5～6月北海道のニシン卵を佐渡島付近に移植する官用出張した。しかしこの結婚はうまくいかなかった。

9月には、東大動物学教室で魚類の研究にうちこみ、日本産脊椎動物目録の作製に着手、だんだん太平洋全域へのびひろがり、渡米を考え出している。10月遂に破婚、別居(正式離婚は1889年)、11月米国へ留学した。この事件があつて内村は人生の転機を迎えた。

「ああ、すべては明らかになった。僕は神の大能の御手の下にへり下って耐え忍ぶ。ただキリストの中にいます神だけが悩みの時の僕のかくれ場である」と苦悩した。かねて実業界、漁業者、官界にも失望していた内村は辞表を提出するとともに、天職と決めていた水産学をも棄てる気になってきた。精神界に全人を投入した。

破婚が内村の背負う十字架となった。自分の靈魂を救う大問題にかけて慈善事業を学ぼうとペンシルバニア州エルウィンの白痴院にはいった。しかしまだ水産の方は棄てず、あちこち視察調査して歩いた。明治18年7、8月、グロスター漁港に滞在休養中に心中煩悶の末、天と霊について「人の義とせらるるは信仰に由り、律法の行いに由らず」と悟りを開いた。9月アマスト大学(総理J. シーリー博士)を訪ねて入学し、人生観は一変した。「バチラー・オブ・サイエンス」となって帰国したのは1888年5月、28才の時である。シーリー師により、「十字架の上にわが罪をあがないたもうイエスを仰ぎ見ること」を知り、自らを神と陽光に委ねること、信仰の何かを初めて悟った。イエスと日本の2つのJのためにと新しい希望を燃やして帰国した。北越学園に赴任してキリスト教教育の理想の実現をはかったが宣教師団と衝突し、東京へもどった。この年(1888)佐渡でニシンが漁れたのは4年半前に自分が北海道から移植したニシン卵が孵化して成魚になって来たものと喜んだ。「日本海魚類は科学的に研究されたことがなく、自分はその最初の魚類学者、となるものだった。だが今では「人間の魚」がもっと自分の注意を引くものになった」と記した。1889年

水産伝習所で動物学を教え、横浜カズと結婚、翌年一高の嘱託教員(万国史)になった。1891年教育勅語奉読式に「不敬事件」を起こして退職、彼も病み、妻は病死した。1892年大阪泰西学院に赴任、岡田静子と結婚、熊本英学校(1893)、名古屋英学校(1896)、東京万朝報(1897)、東京独立雑誌創刊(1898)と転々するうちに、完全な宗教家となり、水産学の影は消えた。「基督教徒の慰」(1893)、「求安録」等々の著述が続々生まれた。1912年(52才)に愛児ルツ子を亡くして「復活」の信仰をかため、唯一書バイブルの人となり、人を漁り、人を牧する日々を送った。数知れない若者たちが信仰のより所を求めてその講筵に集まって来た。東大総長になった矢内原忠雄や南原繁、東海大総長になった松前重義などもその中にいた。永遠の青年内村は若者たちの胸中に灯を点けた。

内村鑑三先生は天才で、ふつうの物尺でははかれない強烈な個性の持主だったから、多くの弟子にそむかれ、弟子たちを追放もし、またそれらの人々がひきよせられたりした。筆者も大学生のとき学友に誘われて柏木の講義を聴いたことがある。やはり先生の魅力の放射のとりこになって53年後の海の老書生のわが身を漁網の中の小魚として省みる。正に色即是空である。

「海よ、海よ、われを寛くせよ。海よ海よ、われを清くせよ」(内村鑑三、地人論、1894)は、また筆者の願望でもある。1921年、61才の内村先生は言われた「余は人に嫌われたが故に神にまで追いやられたのである。そうして余は人に嫌われてはじめて神の慈悲の何かを知った」。実に真率な、打ち砕かれた魂の告白である。墓碑銘(英文)には「吾は日本のために、日本は世界のため、世界はキリストのために、そしてすべては神のために」とある。星辰は生まれ、育ち、死し、また再生輪廻することを近代天文学は教える。星塵と同根で宇宙の精霊を宿した私どもの生命も大宇宙の奇しき力のままにある。

●東京水産大学名誉教授



筆者プロフィール ●明治38年高知市生まれ。高知一中、二高を経て昭和2年東京帝国大学理学部物理学科卒業。農林省水産講習所、同水産試験場技師、神戸海洋気象台長、長崎海洋気象台長、東海区水産研究所長、東京水産大学教授(現在同名名誉教授)、東海大学海洋学部教授を歴任し、現在日本海洋学会名誉会員(第1回同学会賞受賞)、水産海洋研究会名誉会員。昭和14年「海洋の潮目の研究」で理学博士。昭和45年国際海洋科学大会(東京)組織委員長。昭和52年「海」勅題御歌会召人。主な著書:「海」(岩波新書)、「海と魚」(岩波少年文庫)、「海洋気象学」(天然社)、「海洋漁場学」(厚生閣)、「世界海洋探検史」(河出)、「海に生きて」(東海大学出版会)、「海を守る」(東大出版会)、「世界海洋研究発達史」(東海大出版会)、「海洋の開発と将来」(通信教育振興会)。(うだ・みちたか)